

師匠

2021.2.23

「他人の振り見て我が振り直せ」という言葉がある。悪いことをしている、感心しないことをやっているなど、他人の言動の善し悪しを見て、自分の振る舞いを反省し、直すべきところは改めよという教えである。

これは、間違っただようなことをやるような人間でも師匠とせよということにもなる。師匠には二つある。プラスの師匠とマイナスの師匠である。よいことをするのはそのまま真似をしてよいプラスの師匠である。悪いことをして、やってはならないようなことをして、それを真似をすまいというのは、師匠は師匠でもマイナスの師匠である。

そう考えると、世の中のものは、こちらさえしっかりしていれば、師匠でないものはないわけである。吉川英治の言う「我以外皆我師也（われ以外みなわが師なり）」である。あれはダメだというふうに捨ててしまうのは、気の小さい、奥の浅い人間がやることである。どんな人間に対しても、悪い人ならばその人の真似をしない。賢い人ほど悪い人まで師匠にするようである。

プラスマイナスの別はあっても、こちらさえ落ち着いて広い心をもっていけば、世の中の人すべて、師匠ではない人はいないということになる。このことは、何でもないようなことかもしれないが、毎日憤慨して生きるよりは、ずいぶんと嫌な人にも会うけれども、ああいうことをしてはいけなないと、こちらは授業料を払っているわけではないが、ただで教えてくれるわけなので、ありがたいと思ったほうがよい。

そういうふうを考えていると、世の中が広々としてくるし、悪いことをやっても、その人に人間としての愛情を持つことができるかと思えてくる。

若い頃は、とてとてもこんなことは思えなかった。今でも、マイナスの師匠と見ることができているかという「そうだ」とは言い切れない。思い返すと、自分がマイナスの師匠だったのではと思えてくる。自分の振る舞いが、誰かのために役立ったのであればよいが、とてもそうは思えない。

吉川英治の「我以外皆我師也」という言葉に出会ったのは、自分が教頭になり、モットーに「寛容」を付け加えた頃である。年齢は、40歳を過ぎていた。今思うと、出会うべくして出会った言葉だと思える。見事なタイミングである。

「他山の石」よりも「我師」、それよりも「師匠」の方が意味合いが強い。マイナスの師匠をもてるようになるには、なかなかの力量が必要に思う。それ相応の時間と経験も必要である。私の場合は、マイナスの師匠をもつのにだいぶかかってしまったが、できるだけ早いうちにマイナスの師匠もプラスの師匠ももてるとよい。その人の生き方に関わる大事な要素の一つである。